

令和元年5月20日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04758

研究課題名(和文) 諸地域の世界遺産の伝達を通して異文化理解を深めるESD授業モデルの開発

研究課題名(英文) Developing a lesson program as an ESD to promote cross-cultural understanding through discussing regional World Heritage Sites

研究代表者

永田 成文(NAGATA, Shigefumi)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：40378279

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、地域の世界遺産を文化景観ととらえ、お互いに伝え合うことで異文化理解を深めるESDとしての授業プログラムを開発した。2016年度、日本とオーストラリアの生徒は地域の世界遺産の特色と価値を考えた。2017年度、両国の生徒は世界遺産をもとに人々の考え方(価値観)を考えた。2018年度、両国の生徒は相手国の地域の世界遺産への対応を考えた。日本の生徒は、写真やイラストを使った紙のボードを活用して、オーストラリアの生徒に遠隔会議で伝えた。日本の生徒の授業アンケートの結果から、世界遺産の特色や価値について関心や認識が深まり、世界遺産を保護する活動に参加する意欲が高まることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまで研究の蓄積が少なかった文化領域のESDとして、世界の諸地域の世界遺産の価値や背景について学習者が主体的に探究して自分とのつながりととらえ、その成果を伝え合うことで他地域とつながる異文化理解を深める授業を系統的に開発した。ESD授業プログラムの有効性を検証し、改善策を提案することでモデルとして高めていくところに本研究の学術的意義がある。異文化理解を深める文化領域の系統的なESD授業プログラムを提案することで、教育現場に文化領域の手法を広め、異文化理解の重要性をアピールできる。人類共有の財産である世界遺産の価値や対応を考えることで多文化共生の態度の育成にもつながる。

研究成果の概要(英文)：This study was performed to develop a program as an ESD to promote cultural understanding and facilitate communication between diverse World Heritage Sites.

The 7th grade students were encouraged to think about value of World Heritage Sites located in their own region in 2016. The 8th grade students were encouraged to think about Japanese way of thinking through learning about the background of World Heritage Sites in 2017. The 9th grade students were encouraged to think about the measure for the World Heritage Sites located in Australia in 2018. In a video conference, Japanese students reported their findings on World Heritage Sites to Australian students through brief sentences, photographs, and illustrations on paper boards.

A questionnaire survey indicated that Japanese students understood the unique aspects and cultural importance of World Heritage Sites. Moreover, the students showed increased willingness to participate in the protection of World Heritage Sites.

研究分野：社会科地理教育

キーワード：世界遺産 ESD 異文化理解 コミュニケーション 遠隔会議

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

自国の文化をもう一度見つめ直して大切にしようとする動きの1つとして、2001年のユネスコ総会で「文化的多様性に関する世界宣言」が採択された。これを受けて、2002年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」では、ESD(持続可能な開発のための教育)が日本から提案され、世界的に推進される契機となった。

ユネスコはその理念である平和な世界の構築に向けて、戦後一貫して国際理解教育を推進してきた。平和な世界を持続的に構築するためには、学校教育において学習者が地域や自国の文化を理解し、世界の文化の多様性を受け入れ、異文化を尊重し、対応していこうとする態度を育成することが求められる。ESDの国際実施計画(2005)において、環境・経済・社会領域のテーマが強調されたため、学校教育におけるESDは環境や経済や社会領域が中心となり、文化領域の授業開発が推進されていないのが実情である。

2. 研究の目的

ユネスコは、現代世界の諸課題の解決に向けて行動の変革を促すことを目的としたESDとともに、人類共通の宝である世界遺産を次世代に伝えることを目的としたWHE(世界遺産教育)を推進している。世界遺産は世界各地に存在し、その8割は文化遺産である。文化遺産は、地域の人々が作り出した価値ある文化であり、地域の文化景観としてとらえれば、その背景として社会の伝統や人々の考え方(価値観)に迫ることができる。世界遺産は、ESDの重要なテーマの1つとして示された「文化の多様性と異文化理解」に位置づけることができる。

世界の諸地域に存在する世界遺産を取り上げて、その特色や価値や背景を考える授業は、分布や空間の概念から考察する地理教育で行うことが考えられる。「持続可能な開発のための地理教育に関するルツェルン宣言」(2007)では、ESDで示された行動テーマを世界の地理教育で盛り込むよう提唱された。本研究の目的は、文化の多様性を受け入れ、異文化を尊重し、異文化に対応していこうとする態度を育成するために、地域や国や世界の世界遺産を教材とする異文化理解を深めるESD授業を開発し、授業実践の分析をもとにESD授業モデルに高める方向性を提案することである。

3. 研究の方法

本研究は、ユネスコスクールである三重大学と三重大学教育学部附属中学校の社会科と英語科が連携し、日本とオーストラリアの中学校において、異文化理解の深まりに対応した、地域の世界遺産の特色や価値を伝え合うESD授業、国の世界遺産の背景となる人々の考え方(価値観)を伝え合うESD授業、相手国の世界遺産への対応をお互いに伝え合うESD授業を開発し、授業実践を行う。異文化理解を深めるESD授業プログラムは、3年間の成果を系統的に分析するために、中学校の同一学年の集団を対象とし、以下のように系統的に異文化理解を深めていく。各ESD授業のプログラムについて、アンケート調査等から学習者の異文化理解の深まりを分析し、有効性を検討する。その結果を踏まえて改善し、系統的なモデルへと高めていく。

- 1) 第1学年を対象に日本とオーストラリアの自国の世界遺産の特色や価値を伝え合うESD授業を開発し、授業実践を行い、異文化理解の深まりを分析する(2016年度)
- 2) 第2学年を対象に日本とオーストラリアの自国の世界遺産から人々の考え方(価値観)を伝え合うESD授業を開発し、授業実践を行い、異文化理解の深まりを分析する(2017年度)
- 3) 第3学年を対象に日本とオーストラリアのお互いの国の世界遺産に対する対応を考えるESD授業を開発し、授業実践を行い、異文化理解の深まりを分析する(2018年度)

2016-2018年度の1学年と3学年の同一集団で、ESD授業を積み重ねることにより、異文化理解の深まりを分析し、系統的なESDプログラムとしての有効性を検討する。

4. 研究成果

(1) 2017年度のプログラムの概要

2017年度に、日本の伝統的な文化の発祥地である京都と奈良の世界遺産を通して日本の人々の考え方(価値観)をとらえ、オーストラリアに伝達する異文化理解教育としてのESD授業プログラムを開発し、次のように実践した。

附属中学校では、社会科特設授業《授業前にアンケート1回目》で日本とオーストラリアの世界文化遺産を通して人々の考え方(価値観)が読み取れるかを考えた(2h)。夏休み課題で世界文化遺産(京都・奈良)調べを取り入れ、それをもとにクラス内でチーム分けを行った。総合学習で生徒が取り上げたい京都・奈良の世界文化遺産について、特色や価値や日本の人々の価値観を日本語で考えた(1h)。その際、次の項目を示し、担当者が2文ずつ考えるように指示した。

- 1) 取り上げる世界文化遺産の位置・特色やそのものの価値
- 2) 世界文化遺産から見る日本の伝統文化(なぜつくり、どのように伝わったかなど)
- 3) 世界文化遺産から見ることのできる日本の考え方や価値観(こころのふるさと)
- 4) 世界文化遺産についてどう思っているのか(日本のこころのふるさとへの評価)

生徒は英訳とボードのイメージを考え(1h)《イメージ後にアンケート2回目》、相手にわかりやすく伝えるためにボードに表現した(2h)。選抜クラスの生徒は、英語授業で伝える練習を行い(1h)、遠隔会議でオーストラリアのベドポールディング学校の同学年の生徒と学習成果を

伝え合った(2h)。附属中学校の生徒は京都・奈良の世界文化遺産の特色やその背景にある日本の人々の考え方を表現したボードを使って、遠隔会議システムを用いてオーストラリアの生徒と伝え合った。オーストラリアの生徒は先住民(アボリジニ)の聖地であるウルルを中心に発表した《遠隔会議後にアンケート3回目》。

(2) 分析方法

2016-2018年度のそれぞれのプログラムで生徒に同じアンケート調査を実施した(第1表)。項目1～5は社会科の認識や資質を意識した世界遺産についての学習成果や行動の変革に関わる項目、項目6・7は英語のコミュニケーションを意識した学習成果の発信や行動の変革に関わる項目である。それぞれの項目で、a.強く(とても)思う、b.少し思う、c.あまり思わない、d.まったく思わないから選択させ、この順に4, 3, 2, 1の数値をあてはめた。項目1～7のそれぞれについて、対応のある一要因分散分析を行った。2017年で対象となる32名の1回目から3回目までの平均値と標準偏差(SD)、分散分析の結果を示したものが第2表である。

第1表 アンケート項目

世界遺産についての学習成果や行動の変革に関わる項目	
関心(遺産)	1. 世界遺産について興味・関心がある。
認識(遺産)	2. 世界遺産の特色や価値をわかっている。
責任(遺産)	3. 世界遺産のことを普段から考えている。
行動(宣伝)	4. 世界遺産をアピールする活動に参加したい。
行動(保存)	5. 世界遺産を保存する活動に参加したい。
学習成果の発信や行動の変革に関わる項目	
関心(会話)	6. 地域(三重県/日本)や外国の世界遺産のことにについて外国の友達と話したい。
行動(会議)	7. 地域や外国の世界遺産について外国の友達と伝え合うテレビ会議に参加したい。

第2表 客観式アンケート結果(2017)

	項目	N	1回目		2回目		3回目		F値	多重比較
			平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
世界遺産 学習成果	1.関心(遺産)	32	2.84	.57	2.84	.57	3.44	.62	20.92 ***	1回目<3回目***, 2回目<3回目***
	2.認識(遺産)	32	2.66	.79	2.53	.62	3.09	.69	8.21 ***	1回目<3回目*, 2回目<3回目***
	3.責任(遺産)	32	1.72	.77	1.84	.57	2.22	.71	7.60 ***	1回目<3回目**, 2回目<3回目*
	4.行動(宣伝)	32	2.44	.67	2.69	.69	3.09	.73	10.72 ***	1回目<3回目***, 2回目<3回目*
	5.行動(保存)	32	2.50	.67	2.91	.64	3.25	.67	15.85 ***	1回目<3回目***, 1回目<2回目**, 2回目<3回目*
学習成果 発信	6.関心(会話)	32	2.63	.71	2.88	.71	3.34	.70	17.83 ***	1回目<3回目***, 2回目<3回目***
	7.行動(会議)	32	2.66	.87	3.09	.73	3.44	.67	15.07 ***	1回目<3回目***, 1回目<2回目*, 2回目<3回目**

有意確率は*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$ を示す。3回のアンケートに回答した2-D組の32名を対象とした。

(3) 分析結果

項目1関心(遺産)については、0.1%水準の主効果が見られ($F(2,62)=20.92$; $p<.001$), Bonferroni法による多重比較の結果、1回目と3回目、2回目と3回目の間に0.1%水準の有意差が見られた。項目2認識(遺産)については、0.1%水準の主効果が見られ($F(2,62)=8.21$; $p<.001$), Bonferroni法による多重比較の結果、1回目と3回目に5%水準、2回目と3回目の間に0.1%水準の有意差が見られた。項目3責任(遺産)については、0.1%水準の主効果が見られ($F(2,62)=7.60$; $p<.001$), Bonferroni法による多重比較の結果、1回目と3回目に1%水準、2回目と3回目の間に5%水準の有意差が見られた。項目4行動(宣伝)については、0.1%水準の主効果が見られ($F(2,62)=10.72$; $p<.001$), Bonferroni法による多重比較の結果、1回目と3回目に0.1%水準、2回目と3回目の間に5%水準の有意差が見られた。項目5行動(保存)については、0.1%水準の主効果が見られ($F(2,62)=15.85$; $p<.001$), Bonferroni法による多重比較の結果、1回目と3回目の間に0.1%水準、1回目と2回目の間に1%水準、2回目と3回目の間に5%水準の有意差が見られた。

項目6関心(会話)と項目7行動(会議)に関しては、球面性の仮定が成り立たなかったため、Greenhouse-Geisserの方法による検定を行ったところ、前者は0.1%水準の主効果が見られ($F(1.57, 48.69)=17.83$; $p<.001$), Bonferroni法による多重比較の結果、1回目と3回目、2回目と3回目の間に0.1%水準の有意差が見られ、後者は0.1%水準で主効果が見られ($F(1.64, 50.70)=15.07$; $p<.001$), Bonferroni法による多重比較の結果、1回目と3回目に0.1%水準の有意差、1回目と2回目に5%水準の有意差、2回目と3回目の間に1%水準の有意差が見られた。全体で社会参加の意識が高まったといえる。

項目4行動(発信),項目5行動(保存),項目7行動(会議)は全て0.1%の主効果が見られることからESD授業により生徒の行動の変革が促された。また,2016年,2018年のESD授業においても同様の傾向が見られた。3年間で世界遺産の特色と価値,世界遺産を通じた人々の考え方(価値観),世界遺産の価値や考え方を踏まえた対応を伝え合い,生徒の関心や認識も高まった。以上より,異文化理解を深める系統的なESD授業プログラムと評価できる。

3年間のプログラムを通して,附属中学校の生徒は社会科に関する世界遺産そのものをとらえる意識より,遠隔会議に向けたコミュニケーションに意識が向く傾向があった。今後,世界遺産に対する思考・判断過程をより充実させた異文化理解を深めるESD授業プログラムへと改善していく必要がある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 9 件)

永田成文「社会参加の意識を高める社会科と英語の連携による異文化理解学習の開発 - 地域の世界遺産の伝達を通して - 」『日本教育大学協会研究年報』第37集,2019,pp.67-79

査読有

金野誠志「問われ続ける「顕著な普遍的価値」の理解を促す世界遺産学習の試み - 文化遺産に関する知識と価値観の形成過程に着目して - 」『地理教育研究』第24号,2019,pp.1-10

査読有

金野誠志「シンガポール植物園における「世界遺産教育」の特色と意義 - シンガポール教育省の世界文化遺産を扱う教育との比較を通して - 」『地理教育研究』第23号,2018,pp.1-10

査読有

永田成文「ふるさとの魅力を再発見する高等学校地理におけるESD授業の開発 - 観光教育の視点を取り入れて - 」『地理教育研究』第22号,2018,pp.1-10,査読有

金野誠志「文化遺産の「顕著な普遍的価値」を相対化する世界遺産教育の試み - 「紀伊山地の霊場と参詣道」八鬼山問題を事例として - 」『地理教育研究』第22号,2018,pp.20-29

査読有

金野誠志「世界遺産として文化遺産を保存する意味や意義を考える世界遺産学習 - 『顕著な普遍的価値』の解釈や適用に視点を当てて - 」『グローバル教育』vol.20,2018,pp.31-47

査読有

Karen Lopezruth Martinez and Hiroko Arai「A study of foreign language anxiety in student teachers in Mexico and Japan」『Philologia』49,2018,pp.69-78,査読有

永田成文「相互の文化を尊重する態度を育てる小学校社会科異文化理解学習 - 日本と中国の箸食文化に着目して - 」『三重大学国際交流センター紀要』第12号,2017,pp.1-16

査読無

田部俊充「「地理総合」と国際理解・国際協力 - 企画趣旨・少数民族を扱った映画から考えたこと - 」『新地理』第65巻3号,2017年,pp.101-105,査読無

[学会発表](計 11 件)

永田成文「地域の世界遺産を通して人々の価値観を考える地理ESD授業の開発」日本地理教育学会第68回大会,2018

田部俊充・永田成文「世界遺産教材を活用した中学校世界地誌学習の開発と授業実践 - ニューヨーク「自由の女神」の場合 - 」日本地理教育学会第68回大会,2018

Shigefumi NAGATA・Toshimitsu TABE「The Geography ESD Lesson for Deepening a Cultural Understanding through Communication of World Heritages」2018 IGU Regional Conference, Quebec City Convention Centre

金野誠志「世界文化遺産における「顕著な普遍的価値」に関する生徒の理解と実践の方向性」全国地理教育学会第12回大会,2018

Hiroko ARAO, Shigefumi NAGATA「The effects of intercultural video conferences: in a case of Japanese junior high school learners of English」EuroCALL2018

永田成文「異文化理解を深める中学校における地理ESD授業の開発 - 地域の世界遺産を外国に伝える活動を通して - 」日本地理教育学会第67回大会,2017

永田成文「ふるさとの価値をとらえなおす高等学校地理における観光教育の授業開発」全国地理教育学会第11回大会,2017

金野誠志「文化遺産を扱う世界遺産教育の再検討 - 世界遺産一覧表への登録に関する賛否に着目して - 」全国地理教育学会第11回大会,2017

金野誠志「世界遺産教育の再検討 - 世界文化遺産にまつわる「顕著な普遍的価値」に着目して - 」日本グローバル教育学会,2017

永田成文「持続可能な社会の構築を目指す地理ESD授業の推進」(招待講演)全国地理教育学会第10回大会,2016

Shigefumi NAGATA「ESD lessons to raise awareness of social participation in a Japanese elementary school」IGU-CGE Singapore Conference 2016, National Library, Singapore

〔図書〕(計 5 件)

原田智仁・永田成文他 21 名 『平成 30 年版 学習指導要領改訂のポイント 高等学校地理歴史公民』 明治図書, 2019, 127(p22-25)

井田仁康・中尾敏明・橋本康弘・永田成文他 23 名 『授業が変わる! 新しい中学社会のポイント』 日本文教出版, 2017, 214(p106-109)

澤井陽介・永田成文他 20 名 『平成 29 年版 学習指導要領改訂のポイント 小学校・中学校社会(『社会科教育』PLUS)』 明治図書, 2017, 118(p46-49)

井田仁康・永田成文他 21 名 『教科教育における ESD の実践と課題 - 地理・歴史・公民・社会科 - 』 古今書院, 2017, 297(p269-271)

唐木清志・永田成文他 11 名 『公民的資質とは何か - 社会科の過去・現在・未来を探る - 』 東洋館出版社, 2016, 166(p116-125)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 田部 俊充

ローマ字氏名: (TABE, Toshimitsu)

所属研究機関名: 日本女子大学

部局名: 人間社会学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 20272875

研究分担者氏名: 金野 誠志

ローマ字氏名: (KANO, Seishi)

所属研究機関名: 鳴門教育大学

部局名: 大学院教育学研究科

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 50706976

研究分担者氏名: 荒尾 浩子

ローマ字氏名: (ARAO, Hiroko)

所属研究機関名: 三重大学

部局名: 教育学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 90378282

(2)研究協力者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。